

保育の「ほりおこし」から見えるもの

生沼 晴美

子どもたちと過ごす幼稚園の一日は、あつという間に過ぎていく。その一日を思い起こすと、子どもの成長を感じたり、思わず笑ってしまうような楽しい出来事とともに、「あの時こうしておけば良かった」「あの時のあの子はどんな気持ちだったんだろう」などと、心に引っかかるすっきりしない出来事や思いが必ずあるものだ。しかし、日々の忙しさに追われるあまり、その引っかかりを深く掘り下げることが出来ずにいるのも現実のように思う。

また、子どもの成長を日々目の当たりにしながら、さて自分はどうかと立ち止まると、一体自分は成長しているのか、保育者が育つとはどういうことなのかと問わずにはいられなくなる。保育者の成長については様々な形で研究がなされているし、保育者の成長のために各地で多くの研修が行われている。保育に携わる誰もがより良い保育者になりたい、子どもたちとの生活を意味あるものになりたいと願うのは当然のことである。

保育の現場に身をおきながら、子どもの成長の過程に様々な姿があるように、保育者の成長の過程にもそれぞれの歩みがあることが、当たり前だが、私にも理解出来るようになってきた。そしてその成長のきっかけになるのが、毎日繰り返し返される子どもたちとの生活の中で、心に何か引っかかる出来事に出会ったり、すつきりしない思いを抱き、立ち止まって自分に問いかけていくことなのではないかと思うようになった。ここで、ビデオを利用した園内研修を振り返ることによって、保育者の成長というものを、私なりの方法で考えてみたいと思う。

保育経験三年目の九十七年度当時、私の勤務する園では、三年保育三歳児として入園してきた子どもたちの、三年間の成長過程を対象とするビデオ記録をもとに、園内研修が始められた。研究者二名（撮影者も含む）と保育者全員で、実践の中から立ちあらわれてくる保育の課題について検討することが始まったのである。

私はその三歳児のクラス担任として園内研修に参加することとなった。

当時、撮影される当事者として、ビデオで映し出される子どもたちと、子どもにかかわる自分の姿を見る、その姿をもとにして話し合いをするということには、私には苦痛であることのほうが多く、辛いものだった。保育者としての自分自身が評価される、子どものことは担任の私が誰よりも知っていなければならぬなどという強迫観念にとらわれ、話し合いでは、何とか自分のぼろが出ないようにと必死だったからであろう。特に話題にのぼったのはビデオの中で大人の後を無言で追っていたK男―入園当初から不安が強く、遊びが見つかからないことの多かったK男―と私の関係であり、K男が遊び出せる状況作りや具体的な遊びの援助の必要性についてであったが、振り返ってみれば、当時の私は、K男が遊べないのは、遊び方を知らない、人間関係が作りにくいというK男自身がつ

課題であるとし、保育者としてK男とともに状況を改善する姿勢を持っていなかった。私はK男の置かれた状況を自分から切り離し、自分の保育の課題として引き受けることが出来なかったのである。自分がどのよう具体的な保育行動を取っていけばよいのかも、まったく分からずにいたのである。またなかなか変化の表われないK男との関係に、ギクシヤクした複雑な思いを抱いていた。それなのに、他の保育者の前では「どうすれば良いのかわからない」と言うことが出来ず、自分は精一杯しているのだ、K男の自己問題なのだと主張していたのである。結果として一年間、私はK男に深くかかわることが出来ず、遊べない状況はほとんど改善せずに次年度に持ち越されてしまった。

そうして、すっかりしない思いをずっと引きずりながら、次年度以降は撮影対象のクラスの担任という立場を離れ、客観的な立場で話し合いに参加するようになった。しかし、そこで初めて、私は自分の保育の課

題が何であるかに気づかされたのである。ビデオに映し出されるのは、他の保育者がある子どもの状況を把握し、その状況を改善する援助の方法を模索して悩む姿。まるで一年前の自分のことのように感じられるが、その保育者はどうしていいか分からないなりに、改善策を見つけようと積極的に子どもにかかわっていく。「状況を改善する援助の方法が分からずにいた」(実際には保育行動を起こしていない)「自分と、「状況を改善する援助の方法を模索して悩む(行動を起こしながら試行錯誤する)」保育者との違い、そして保育者の思いや行動と子どもの思いや行動とが相互に絡み合って、新しい状況が生れて来ることに気づいた私は、改めて前年度のK男と自分とのかかわりを問い直すこととなったのである。

ビデオ記録とあわせて、眠っていた保育記録を「ほりおこし」、もう一度私のK男理解、遊びの様子、保育者としてのかかわりを検証してみると、私はK男が

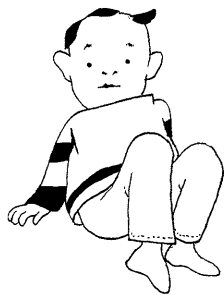
自発的に遊び始めて欲しいという願いを強く持ちながら、その自発性が発揮されるような状況を全く作ろうとしていなかったことが明らかになった。子どもに対する期待ばかりが大きく、自分の行動が伴わず、子どもたちの思いや行動と、それに応じた私の判断や保育行動を相互に絡まらせ合いながら、遊べる状況を作り出していく視点が欠けていたことが明白になったのである。園内研修での気づきも、保育記録の「ほりおこし」によって裏づけされ、ここで私は初めて、保育者としての自己のあり方をはっきりと確認し、自覚することが出来たのである。このことがきっかけとなって、K男と私の間で遊びの状況作りという狭い視野から出発した保育の課題は、日々の保育の中で起こる出来事を通して、全体的な保育の視点、また保育者のあり方の模索へと移行していく。子どもが遊ぶ中で、保育者として私は何をどう捉えていくのか、その上で、具体的にどのような遊びの状況作りをしていくのか

大きな課題となっていたのである。以下に、その後の園内研修や保育記録の「ほりおこし」からの気づきを考察してみたいと思う。

遊びへの援助と保育者の姿勢

(1) 意識を注いでいく事

事例¹ 四月末頃には、年中の男児数名がホール（遊戯室）で積み木や衝立、巧技台を組み合わせて家や基地を作る事が続いていた。四月二十七日、私はR男と共に積み木を重ねて、R男が既に作っていた家の入り口を作る。重ねた積み木の上に板を置き、三角の積み木を屋根のようにした。片付けが始まると、重ねた積み木を下の方から片付けようとしたR男が、落ちてきた積み木で怪



我をしてしまう。そのすぐ後に、同じホールで、K男とS男がぶざけて衝突を倒し、一部を壊してしまう。

私は同じ場にながら、この二つの出来事が起こったことを見逃し、後から対応することとなった。ホール全体の遊びの状況、子どもたちの動きを捉える私の視点が、ごく限られていたことの表れである。しかし、少し経って振り返ってみると、私はR男が怪我をした場面を見てもいるし、K男たちがホールを走り回り、衝突に近づいた事も見ているのである。つまり、この二つの出来事が、まるで目に入っていないかっただけではない。目では見ているのに、意識がそこに注がれていなかったのである。このことから私は、一つの遊びにかかわり、意識を注いでいくこと（一人の子どもにかかわり、関心を寄せていくこと）と同時に、全体がどのように動いているのかに意識を注いでいくことの重要性に気づかされる。

(2) かかわりの捉え直し

事例2 十月二十八日 朝から鬼ごっこをしていたM子らと私。途中で、H男に呼ばれて抜ける私に「後で来てね」とM子。私はH男らとブーメラン作りをしてから庭に戻ってM子らと鬼ごっこを再開。少しすると、I男に呼ばれて、私はまた抜ける。I男とG男はウルトラマンごっこの怪獣役を探していた。私はそこで、怪獣になって戦う。その間に折り紙を始めたD男が、私に手助けを求めたため、ここで怪獣もやめてしまう。おやつの時間になり「椅子を丸くしよう」と子どもたちに声をかけると、「先生は約束を守らないから、嫌だ」とM子。「怪獣になってくれるって言ったのに……」とI男。二人の顔が曇っていた。

この日の園内研修では、保育者が、それぞれに展開されている子どもたちの遊びの、どこに、どのようにかかわりたいのかという意志を持つことが話題となっ

た。ビデオに映し出されたのは年長児の遊びであったが、私には自己の問題であった。この一日を振り返り、M子とI男の言葉は、私の保育の姿勢を言い当てていると受け止めた。私の保育行動は、私の意図に基づいたものではなく、子どもたちの要求に、その場限りに応える事で忙しく、場を転々としていただけであるように思える。私のそのような態度は、一見子どもの要求を満たすもののようにもあるが、実際には子どもの思いに沿うものではなく、また、それぞれの遊びを充実させる援助とはなっていない。話し合いが進むにつれ、私はM子らの鬼ごっこでは、簡単なルールを了解し合い、保育者がいなくても遊びが続くようにとの思いを持っていたが、M子の様子を振り返ってみると、保育者と一緒に遊ぶことを求めているように思われること、また、ブーメラン作りでは自分の手で工夫して作り、飛ばしてみる楽しさを味わってもらいたいと思っていたものの、作った後の遊びにつなげる手立

てをしていなかったことに気づいていく。遊びの場を作り、子どもたちがそこで充実して遊び込むためには、保育者がそれぞれの子どもの思いや遊びの内容を的確に判断し、子どもの成長に沿った保育の意図をもってかわっていくことが必要になるのである。私には、この判断と保育の意図を持つことが十分でなかったといえる。

遊びの場作り―「鬼ごっこ」をめぐる―

事例3 十二月六日の園内研修では、年長児の鬼ごっこ、その他の遊びの場の使い方が話題となる。年中児の間でも、ホールでの鬼ごっこが続いていた。他の保育者から、ホールで鬼ごっこをする意図を尋ねられた事により、私はここで、何故ホールで鬼ごっこを始めるのか、自分でもはっきりと認識していなかった事柄を言葉にする事によって確認する事が出来た。二期の後半には、友達とのかかわりが難しいY男のこと

が気になっていた。Y男は自分から他児に働きかけるものの、他児からはなかなか受け入れられない。Y男は追いかけてこや鬼ごっこを好んでおり、私はその遊びを通してY男が他児とのつながりを持つことを期待していた。登園時間が遅いY男や多くの子どもが仲間に入りやすいようにと、ホールの目に付くところで鬼ごっこを始めていたのである。鬼ごっこには多くの子どもが興味を持って参加するようになり、Y男も参加した。それから、外に出て鬼ごっこの続きをするようにしたのである。

もちろん、このことでY男の課題が乗り越えられたわけではなく、Y男の状況を改善するために、また、集団の中でY男の存在が受け入れられるようになるために私なりに判断し、行動したのがホールでの鬼ごっこだったのである。このことを私は、園内研修で他の保育者に表明することにより、自覚化した。話し合い

の中から、私は、幼稚園という場の中の、どこで何をするかが、子どもたちの遊びを支えて

いく上で、また、子ども同士をつなげ、遊びと遊びをつなげていく上で重要な要素になることを認識していく。

保育の計画と子どもの思い、保育者の理解

—グループ活動を通して—

年長組では、五月に入って、それまでの固定化した仲間関係が窮屈になり始めたと感じ、グループ活動を始めた。それぞれの子どもがさらに成長するために、新しい友達と出会い、お互いの「その子らしさ」を受け入れながら仲間関係を広げて欲しいという願いを



持って、保育者の意図を持ったグループを作ったのである。

事例4 グループでお弁当を食べ始めた後のある日、A男が、「先生、今日もグループで食べるの？」と尋ねてきた。「今日は好きなので食べようね」と応えたのだが、A男は、少し経つとまた「今日もグループ？」と尋ねる。お弁当の準備が始めて、子どもたちがそれぞれに自分の場所を決め始めると、A男はまた、「今日はグループじゃないの？」と尋ねる。私は、同じことを何度も尋ねてくるA男に対して、「A男君、今日はグループじゃないって、何度も言ったでしょ」と少し強い口調で応えた。しかし、少し経ってからA男を見ると、仲良しの仲間と離れたところで、涙を流している。何があったのだろうかA男の傍に行き、事情を尋ねるが何も言わない。やっと、「ぼく、B君と座りたかった」と、つぶやいた一言に、私ははっとさせられた。「もしかして、A男君、グループ

でお弁当食べたかったの？ それで、何回も私に聞いたの？」という私の言葉に、涙をこぼしながら頷くA男。

私はこの時、A男がグループでお弁当を食べるのを嫌がって何度も尋ねてきたと考えていたのだが、ひどい思い違いをしていたことに気づかされた。A男は、それまでの固定化した関係に戻ろうとしていたのではなく、新しい友達（B男）との関係を作ろうとしていたのである。その当時のA男は、仲良しの友だちから一緒に座ろうと誘われると断ることが出来ないばかりでなく、まだ自分からB男を誘って一緒に座ろうとも言えないでいたのだろう。グループ活動においては、まだ自分から積極的に周囲に働きかけることが出来ないA男も、自分の思いを遂げることが出来たのである。

この出来事から、子どもの心の動きと私の子ども理解のズレが露呈した。そして、その子が現在置かれて

いる状況を理解することは、その後の成長に必要な手立てをしていく上で欠かすことの出来ない、そして基本的な要素であることを改めて認識させられたのである。また、保育を実践しながら繰り返し反省していくうちに、願いを持ちながら保育の計画を立て、活動をしていく中で、一方的に活動そのもの（形）だけを整えようとし、その活動の中で実際に子どもたちがどんな動きをしているのか、どんな思いを抱いているのかに意識を向けていない私の保育の現実を受け止め始めた。

初めは一人の子どもと私の間での遊びの状況作りという視野の狭い視点から出発した課題は、これまで述べてきたように、日々の保育の中で起こる出来事によって捉え直され、新しい視点が増えられ、保育をしていく全体的な姿勢へと開かれていく。その変化の過程で、保育時には私には見えていなかった子どもの姿

をビデオによって検討すること、それを通して他の保育者の保育観に触れながら、自己の保育観を振り返り、再構築していくことが有効であったといえる。

現在は当時とは違った形で園内研修を続けているが、私は今年度、K男らを三歳児で担任して以来、三年ぶりに再び三歳児の担任として日々を過している。その中で、当時のK男らの様子と自分のあり方をもう一度「ほりおこし」、現在の保育の営みを振り返ることで、新たな気づきが生まれている。保育者の成長にとって、ともに保育をする仲間、自分以外の保育者とかかわりから、保育観や保育行動の上で自分との相違点、類似点を認識することの意義と同時に、保育記録を残すことの意味については、次号で考察したい。

（青山学院幼稚園）

☆なお、事例123は一九九九年度、事例4は二〇〇〇年度のものである。